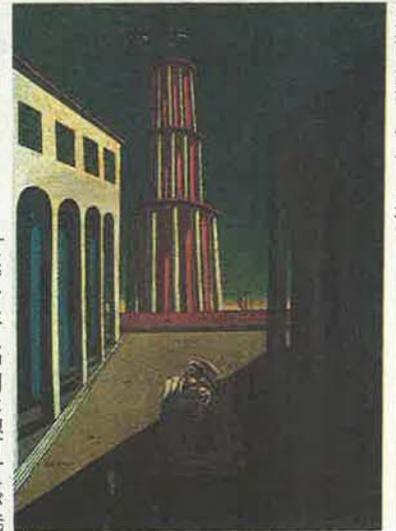


文化



©SIAE, Roma & JASP AR, Tokyo, 2012 D0093

という見方もある。1911年この街で夢を咲かせよと人生を賭した芸術家たち。彼らの力を得、もつとも大輪の花を咲かせたのは、パリそのものだ。たかもかもしれない。(1916年、油彩・カンパ17と堅牢なス、107×74)

た。77年に仲間と漁村計画研究所を設立、全国の漁村環境整備を進めながら、海と共に暮らし、その恵みを得ながら形作られた島国・日本の文化を追い続けた。

三陸沿岸の資料も「著述をまとめた本を編集してほしい」というのが早大の後輩である私への遺言だった。膨大な遺稿のリストは長男の地井重夢がまとめた。純一、神奈川大学の大学院生と作業し、遺稿集は今年ようやく完成した。作業のさなか2011年3月には東日本大震災

漁師の住む村究めた男

◇40年にわたる漁村集落研究者の遺稿まとめる◇

重村 力



伊豆大島が大火に見舞われた時、吉阪は12日うちに復興案をスケッチに描き、翌日焼跡で人々に呼びかけた。「みなさん、希望を失ってはいけません。すばらしい町をこれからつくりましょう」

後に東京都は区画整理による復興を決定し、吉阪研究室の提案はそのままの形で実現しなかつた。だが住宅地を区分けし、道路を引くだけでは血の通った町にはならぬ。そこで当時都内で撤去が進んでいた都電の敷石を神社の参道に再利用し、島特有のツバキで「花のトンネル」をつくることを提案。港の棧橋や井戸など町の人々にとって大切な場所を結ぶ海辺の歩道を計画し、できる範囲で復興を手伝った。地域の伝統や習慣、歴史を掘り起こし、町並み

話を聞く。夜は遅くまで地図を囲んで議論し、雑魚寝した。この活動と思索の中心となったのが地井である。海への信仰心の現れ漁村集落に目を向ける転機になった京都府与謝郡伊根町の舟屋との出会い。この少し前だ。地井は週刊誌の写真に引かれ、丹後半島を訪ねた。伊根浦の小さな入り江を囲んで2階建ての舟小屋が波打ち際すれすれに並んでいる。干満の差が大きい穏やかな海を引き入れた1階部分に舟をつなぎ、作業場や加工場にも使う。家族は道を隔てた場所にある母屋で、波音を聞きつつ暮らす。

漁師はなぜ、海を向いて住むのか。1960年代半ばから40年以上、日本の漁村集落の構造を研究しつつ、そんな根本的な問いかけをしてきた学者がいた。広島大学など各地で教鞭をとった地井昭夫である。早稲田大学で建築家の吉阪隆正に師事した地井は、北海道から沖縄まで小さな漁村を訪ね歩いて膨大な資料と文章を残し



京都府与謝郡伊根町の舟屋集落

私の履歴書

根岸 英一

「自信がある」「向いている」という分野を見つけて研さんに励んでもらいたい。若い世代への要望だ。私自身、失敗にくじけず高

「中国はこれからどうなるだろう」。国日本大使館に駐在して活動を終えた国分さんから手紙が届いた。滞在中、国分さんはランニングやゴルフで満員バスに揺られて北京の隅々を探索。い

交遊抄

増えているなど感じ取ることもできるし、沖合を行き来する船の様子も分かる。「情報の宝庫」だ。多くの漁村では海から遠い場合でも漁師の家は海を向いて立つ。海辺の集落を調べていくうちに、地井はそれが海を分かち合う暮らしに合った形であり、海からの恵みを迎えて感謝する人々の意識や信仰心の現れだと考えるようになる。

現代社会へのヒント 海女の生活を調べながら、地井は新しい家族のあり方も示唆した。能登の海女は季節ごとに住まわす家族の同居の組み合わせを変え、生活の互助

単位を柔軟に組み替える。同居や近居によって家族が伸び縮みする暮らしは、介護をはじめ現代が抱える問題を解決するヒントになるかもしれない。

東日本大震災後に遺稿を「漁師はなぜ、海を向いて住むのか？」(工作舎)という書物にまとめ、地井の研究が一つの像を結んだように感じている。島国に暮らす私たちは漁村からもっと多くを学べるに違いない。彼の仕事を受け継ぎ、多くの漁村が被災した東北の復興に生かしていくことが残された次の課題だと思

ないものがある。局の映画部門と方法は最適だ(龜山氏) 映像の募集を続けたい